



栃木県立図書館

Tochigi Prefectural Library



栃木県立図書館
ホームページ

私の大切な本

残したい

次の150年まで

栃木県立図書館職員がおすすめする

栃木県立図書館では、公開資料室にあるものと書庫にあるもの、併せて約78万冊の本を所蔵しています。たくさんの蔵書の中から県立図書館の職員が個人的におすすめしたいと思う本を紹介します。

栃木県が今年で誕生150周年の節目を迎えたことにちなんで、「次の150年まで残したい私の大切な本」というテーマで選びました。



『“正しい”を疑え！』
(真山仁／著 岩波書店 2022)

効率や生産性が重視され、生活の中の「豊かな無駄」を排除しがちな風潮にある今日。生きづらい昨だからこそ、情報の善し悪しを見極める力を養うことが大切だと作者は訴えている。自分を信じて精一杯生きる素晴らしさに意識を向ける「正しいを疑え」。若い世代の方には是非読んでいただきたい一冊です。

〔1200745725：K159/マヤマ〕

『しもつけ盆踊り考』
(茂木真弘／著 随想舎 1997)

あなたの街の盆踊りは七五？七七？ 中世の踊り念仏から「日光和楽踊り」「八木節」まで、盆踊りの丹念な取材と考察から、栃木の「くらし」がどのようにかたちづくられてきたのかを見せてくれます。

〔2100269063：386/モ〕

『マクリーンの川』
(ノーマン・マクリーン／著 集英社 1993)

元シカゴ大学の教授で、自分と家族を描いた自叙伝です。ブラッドピット主演の映画「A River Runs Through It」の原作です。

〔1103506810：933/2230〕



『常識の研究(山本七平ライブラリー 4)』
(山本七平／著 文藝春秋 1997)

「空気の研究」で有名な山本七平氏の「山本七平ライブラリー」の第4巻。同氏の時事評論を集めた「常識の～」をタイトルとする作品が中心である。収録作品は、昭和50年代後半から60年代のものであるが、評論の多くは今にも当てはまると思わせる内容である。時とともに常識は変わるが、それに囚われず見るべきものがあるのだと山本氏は考えさせてくれる。

〔1104085590：304/1252〕

『徳川家康の決断』
(本多隆成／著 中央公論新社 2022)



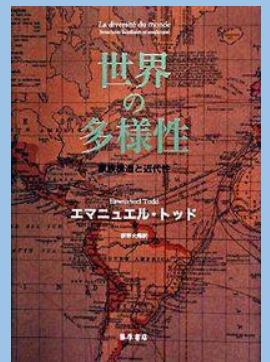
戦国乱世を勝ち抜き、天下を制した徳川家康ですが、三方原の合戦、本能寺の変、関ヶ原の合戦、大坂の陣など、家康が迫られた10の選択を軸に波瀾の生涯をたどります。

〔1106520925：080/83/2723〕

『世界の多様性』
(エマニュエル・トッド／著 荻野文隆／訳 藤原書店 2008)

家族構造が国や地域における政治や経済のベースになっていることを示した『第三惑星』と『世界の幼少期』を収録した一冊。500ページを超え、文章も分かりやすいとは言えないが、私に国や地域間の違いに対する考え方を良くも悪くも変えてくれた本である。

〔1105277675：361.6/358〕



『存在と時間』
(マルティン・ハイデガー／著 高田珠樹／訳 作品社 2013)



ソクラテス以前の哲学者パルメニデスを嚆矢とする「存在への問い」を、「現存在」(＝人間の存在)の分析を通じ、その意味を「時間性」としてとりだし、ひいては存在一般の意味の解明を企図したハイデガーの主著です。もしあなたが「人生」とか「自己」とかについての問いの途上にあるなら、一度は手に取っていただきたい著書です。こんな面白いもんがあるんか、と思うかどうかはわかりませんが、専門用語を術学的だなあと、思う気分をやりすごすと、示唆に富む一行に出会うこと請け合いです。

〔1105965790：134.9/169〕



『愛する源氏物語』
(俵万智／著 文藝春秋 2003)

源氏物語に登場する和歌を歌人俵万智が「万智訳」して紹介する本書は、親しみやすい言葉で登場人物たちの思いや背景をより身近に感じることができます。五七五七七の31音にこめられたのは人の思いや価値観であり、千年以上経った今も変わらず共感する部分があることに気がきます。時代と常識が変わっていくたびに読み返してみたいと思える一冊です。

〔21003181118：913/77〕



『葉っぱのフレディ いのちの旅』
(レオ・バスカーリア／作,
みらいなな／訳, 島田光雄／画 童話屋 1998)

あなたは「死とはなにか」を説明できますか？誰かの死に直面した時、悲しみに打ちひしがれ、受け入れることができないかもしれません。ですが、「死」は誰にでも平等に、いつか必ず訪れます。その悲しみにそっと寄り添ってくれるこの本が、誰かの人生の支えになりますように。ずっと手元においておきたい、そして、大切な人にプレゼントしたい、そう思える一冊です。

〔1200466108：K933/バス〕



『天切り松闇がたり』シリーズ
(浅田次郎／著 集英社)

シリーズですが短編なので、読書になじみのない人にも読みやすく、どんな人にもおすすめできます。目細の安吉一家のメンバーの皆が魅力的なので、きっとお気に入りのメンバー及びお気に入りの話が見つかると思います。(当館所蔵1～4巻)

〔シリーズ：913/アサ/X〕

『深夜特急』シリーズ(全3巻)
(沢木耕太郎／著 新潮社 1986)



バックパッカーのバイブルとも呼ばれている紀行小説です。主人公の「私」はある日、「インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗合いバスで行く」ことを思いつき、仕事を投げ出して旅立ちます。現地で出会った人々の様子や訪れた街が、臨場感溢れる描写で綴られ、自分も一緒に旅をしているかのような錯覚に陥ります。30年以上前の作品ですが、今も色褪せない作品だと思えます。

〔シリーズ：915.6/116/X〕

『現代日本のブックデザイン史1996-2020』
(長田年伸／〔ほか〕編 誠文堂新光社 2021)

「本」には、めくる紙の手触り、文字の配置、表紙のデザイン、タイポグラフィ、すべてのデザインの結晶が小さな枠の中に収まっています。平成の初期から現在まで、ブックデザインの変遷を、一線で活躍するデザイナーたちの解説や対談から知ることができる一冊です。なお著者の一人である水戸部功氏は本県出身です。

〔1106414749：022.5/67〕



『白鳥異伝』
(荻原規子／作 福武書店 1991)

「小俱那はわたしが殺します」
姉弟のように育った、大好きな小俱那（おぐな）が村を滅ぼした一遠子（とおこ）は悲壮な決意を胸に勾玉を求めて旅に出る。

「古事記」に着想を得た古代ファンタジー。日本の古典や古代史、思想史への興味をかき立てる、世代を超えて読み継いでほしい一冊。
※「勾玉三部作」の二作目。

〔1200368536：K913/桂〕

『0メートルの旅 日常を引き剥がす16の物語』
(岡田悠／著 ダイヤモンド社 2020)

ライター兼会社員が書いた海外・国内・地域の旅行記です。旅先での出会いや、感じたことをユニークな視点で描かれています。著者の軽快でシンプルな文章は心地よいです。旅先は16ヶ所、南極、ウズベキスタン、仙台、箱根ヶ崎など、章を読み進めるごとに身近なご近所の旅に舞台は移ります。

コロナ禍、旅に出ることが憚られた「ステイホーム」だった頃、最終章で著者はある旅に出發します。

〔1106417403：290.9/394〕



『科学する麻雀』
(とつげき東北／著 講談社 2004)

科学する麻雀
とつげき東北



「いい流れだからリーチ！」
「今日はツいてないからやめておこう……。」さて、その判断は本当に正しいですか？

曖昧な言葉で語られてきた「答えのない」ゲームを、理論的・数理的・統計的根拠に基づいて捉え直し、「答え」を提示した史上初の傑作。

〔1104890965：080/84/1765〕



〔1105203804 : T959/110/D〕 〔1106588757 : T959/115/D〕

『忘れないでください 宇都宮空襲の記憶』
(小林新子／文, 相原千草／絵 随想舎 2008)

『子どものころの戦争の記憶』(越川栄子／文,
やまなかももこ／絵 随想舎 2023)

当館には78年前の宇都宮空襲の絵本があります。そこには私が昭和7年生まれの母から聞いた戦争の話と同じ光景がありました。子どもだった母も標的にされた米軍機の機銃掃射、真っ赤に焼けた宇都宮の夜空とパニック状態で逃げ惑う人々、苦しかった戦中・戦後の暮らし…。普通の生活をしていた人たちにも戦争は容赦なく襲いかかってきたのです。

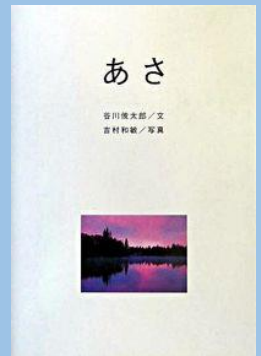
体験談を直接聴くことができなくなっても、語り継いでいってほしい。子どもたちが平和の尊さを感じ、守っていってほしいと願い、この二冊を選びました。



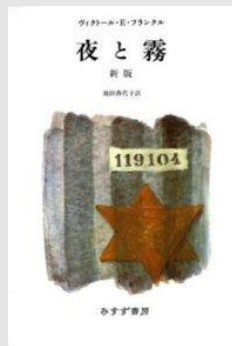
『あさ』
(谷川俊太郎／文, 吉村和敏
／写真 アリス館 2004)

太古の昔から地球上に存在するものすべてが受け継いできたリレー。この世に生を受けた瞬間から、誰もがこのリレーの選手です。あなたのかわりはいません。

〔2100332515 : 911/㊦〕



『夜と霧 新版』
(ヴィクトール・E. フランクル／著,
池田香代子／訳 みすず書房 2002)



第二次世界大戦中の強制収容所における自らの体験を語った本。奇跡的に生還した心理学者の言葉は、人間が極限状況の中で何を考え、生き抜いたのか、ずしりとくるものがあります。戦争という非日常は、人間の日常の延長線上にあるものである、ということを考えさせられます。

〔2100315254 : 946/㊦〕

『日光』
(立松和平／著 勉誠出版 2009)

歴史は風化しやすく、過去の功罪も同様で、受け継がなければ消え失せてしまいます。また、自然や文化、心情は変化し続け、正確に表現するのは難しいものだと思います。本書は日光開山からの歴史、自然の脅威、そして命がテーマの作品で、日光の魅力が余す所なく綴られています。栃木の文豪、立松和平の引き込まれるような情景描写により表現された日光を、後世の人々にも感じてもらいたいと思います。

〔1105315525 : T936/49/C〕

『歌集 白き山』
(斎藤茂吉／著 岩波書店 1949)

茂吉の最高傑作とされる歌集『白き山』は、山形県大石田町で詠まれました。故郷の自然美を格調高い言葉で余すことなく詠み込んだ名歌の数々には、絶唱とされる『最上川逆白波のたつまで』にふぶくゆふべとなりけるかも』も含まれています。次男の宗吉(北杜夫)が編さんした歌集でもあり、「私の小説など茂吉の一首にも及ばない。自分の作品はすべて消えてしまってもいいから、茂吉の歌だけは読み継がれて欲しい」と評しています。

〔1101358867 : 911.16/95/138〕

『最初の質問』
(長田弘／詩, いせひでこ／絵 講談社 2013)



「今日、あなたは空を見上げましたか。」
詩人長田弘さんの言葉と画家いせひでこさんの絵が相乗効果をもたらした、珠玉の一冊。どうぞゆっくりとページをめくり、質問ひとつひとつを心に問いかけてみてください。今のあなたは、また、未来のあなたなら、なんと答えるでしょうか。忙しい日々の中で忘れてしまいがちな「自分にとって大切なこと」を思い出させてくれる、ずっと手元に置いておきたくなる作品です。

〔1200609418 : E/㊦/418〕

